

琉球大学学術リポジトリ

複式学級での授業実践力の育成をめざす教育実践 ー長崎大学教育学部「複式教育論」での試行ー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2008-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉田, 安規良, 山口, 剛史, 村田, 義幸, 原田, 純治, 橋本, 健夫, 八田, 明夫, 河原, 尚武, 立石, 庸一, 會澤, 卓司, Yoshida, Akira, Yamaguchi, Takeshi, Murata, Yoshiyuki, Harada, Junji, Hashimoto, Tateo, Hatta, Akio, Kawahara, Naotake, Tateishi, Yoichi, Aizawa, Takuji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6087

複式学級での授業実践力の育成をめざす教育実践

—長崎大学教育学部「複式教育論」での試行—

吉田安規良*・山口剛史*・村田義幸**・原田純治**・橋本健夫**

八田明夫***・河原尚武***・立石庸一*・會澤卓司*

A Trial for Promotion of Teaching Ability in Combined Class of Two Grades

Akira YOSHIDA*, Takeshi YAMAGUCHI*, Yoshiyuki MURATA**,
Junji HARADA**, Tateo HASHIMOTO**, Akio HATTA***,
Naotake KAWAHARA***, Yoichi TATEISHI*, Takuji AIZAWA*

【要約】

長崎大学教育学部で開講された「複式教育論」の講義に、琉球大学教育学部の「複式学級授業論」担当者が出張し、沖縄県のへき地・複式教育を概説し、長崎県で実際に行われた複式学級での授業実践を追体験しながらその内容を分析するという2つの取り組みを行った。受講学生の講義内容に対する評価は有意に肯定的であった。とりわけ模擬授業分析については「もっと学びたい」という意見が多かった。

1 はじめに

長崎大学、鹿児島大学、琉球大学の教育学部では平成17、18年度の2年にわたり、文部科学省特別教育研究経費措置事業「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」について、三大学が連携して様々な調査・研究事業を行った^{1,2)}。この2年間の成果を糧に三大学が新たに積極的に取り組むこととなったものの1つに複式学級での授業実践力を育むための講義科目の開設があげられる。

長崎、鹿児島、沖縄の三県とも、公立学校教職員として採用された場合、離島やへき地地区への異動が伴う。特に小学校教員の場合には複式学級を設置している極小規模校へ赴任する可能性が高い。例えば、沖縄県で公立小学校教員として採用された場合、定年退職までに5～9回程度の人事異動を経験する。公立小学校総数に対するへき地

指定校ならびに複式学級設置校の割合から試算すると、最低2～3回はへき地勤務が命ぜられ、さらにその内最低1回（3年程度）は複式学級を担当することになる³⁾。沖縄県の人事異動方針^{4,5)}では、「採用後2校目＝離島・へき地地区勤務」となっており、複式学級担当者に対する調査⁶⁾でもほぼ半数が、採用5年以内で初めて複式学級を担当している。さらに採用一年目から複式学級を担当する者の割合も18.8%であり、教員経験が少ない段階で複式学級を担当していかなければならないという現状がある⁷⁾。それに対して沖縄県立総合教育センター等が主催する複式学級指導法の研修受講率は、小学校で42.2%と比較的高いが、全体では24.9%と十分な受講率であるとはいえない。この理由として、研修内容が日常の授業実践に有用であっても、参加旅費や課業日に開講されるという問題のために多くの教職員を参加させる

*琉球大学教育学部 Faculty of Education, University of the Ryukyus

**長崎大学教育学部 Faculty of Education, Nagasaki University

***鹿児島大学教育学部 Faculty of Education, Kagoshima University

ことができないなど学校運営体制への影響が大きいことがあげられる。校内研修での複式学級指導法に関する研修の実施率に至っては3%を下回っている⁸⁾。このことから、採用後の教員向け各種研修だけに依存することなく、教員養成段階で「複式学級での授業実践力」を身につけることが学校教育現場からも強く求められている^{3, 9)}。

こうした学校教育現場が抱える問題を解決する方策の一つとして、大学卒業までに複式学級における授業実践に必要な最低限の素養を身につけることを目指した科目が、今年度から各大学で開設された。鹿児島大学教育学部では、教育実習未履修の2年次学生を対象とした「複式学級指導法」を開設した。長崎大学教育学部では教育実習を経験した4年次学生を対象とした「複式教育論」(資料1)を、琉球大学教育学部では、昨年度の試行³⁾を踏まえ、教育実習を経験した直後の3年次後期に「複式学級授業論」をそれぞれ開設した。鹿児島大学では複式教育の基礎を広く学ぶことを意識した講義形式の内容であり、長崎大学と琉球大学では、受講生の教育実習の経験を基礎として、授業観察や実習を中心とした実践的な事項を意識した内容となっている。特に模擬授業を意識的に取り入れる場合には、「ただ模擬授業を行う」だけではなく、「授業者の意図がどのように伝わり、それが授業全体の構成にどのように影響しているのか」を詳細に分析するなど、その模擬授業を評価・検証する必要もある。さらに上述の現状を鑑みると、授業参観や模擬授業を取り入れた講義を展開する際には、「(教員経験自体も少ない状況で)初めて複式学級を担当する立場」、言うならば「学生の目線」を意識し、講義内容や講義の到達目標が「無理難題」ではないことを実感させる必要もある¹⁰⁾。

昨年度までの成果を基礎として今年度から開始された新たな三大学連携事業「離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成—大学教員と小中学校教員の相互授業訪問を軸として—」では、離島・へき地教育の理論と実践の改善に資するため県域や校種を越えた相互授業訪問を意図的に行い、教員養成段階における離島・へき地校での教科指導力向上カリキュラムを編成し、現職教員向け研究・研修プログラムを作成することで、

少人数教育を支える教員の資質の明確化と向上・充実をめざしている。そこで、長崎大学教育学部の「複式授業論」の一回分の講義を琉球大学の同等科目を担当する吉田、山口が受け持ち、「離島・へき地に普遍的な」、「複式授業のあり方に関する授業実践」を「教員養成段階」に取り入れることを試みた。以下、その実践の概要と受講学生の評価を報告する。

2 講義内容とその意図

「複式教育論」のねらいは「へき地教育、複式教育について理解し、複式授業特有の学び方、指導の仕方について考え、工夫することができるようになる」ことである。学生に、可能な限り多くの複式授業を参観させ「現場で学ぶ」ことを大切にしていきたいと考えていたが、受講希望学生が予想を大幅に上回った¹¹⁾ため、授業参観の機会を十分に作ることができず、教室での講義中心の授業となってしまった。第9回の講義が吉田・山口の実践となるが、それ以前の講義内容を表1に示す。

第9回は通常の講義日である2007年6月11日(月)、第1校時(8:50~10:20)に実施した。当日は40名の学生が受講した。受講生各自に配付した資料は、本時の講義の概略、沖縄県のへき地・複式学級を設置する学校の状況資料¹²⁾、模擬授業分析のためのワークシート、ストップモーション方式での授業分析の説明資料^{13, 14)}、長崎県対馬市立小網小学校第3, 4学年算数科学習指導案(研究授業の指導案)、及び講義アンケート(資料2)である。

はじめに当該講義の主任担当者である村田が趣旨を説明し、この日の講義を担当する吉田、山口を受講学生に紹介した(写真1)。次に吉田が「沖縄の教育の現状とその特徴」を、配付資料とパワーポイントによるスライドを用いながら15分程度概説した(写真2)。ここではまず、沖縄県のへき地指定、複式学級の設置の特徴を概観した。次に沖縄県の教員が採用後5年前後でへき地校や複式学級を経験している現状を紹介した。この目的は少人数・複式指導能力が教員にとって必須なスキルであることを確認させることであった。その際、沖縄県のへき地・複式学級の現状を数量的

表1 2007年前期「複式教育論」の授業内容概要

回	日付	概 要
1	4月9日	オリエンテーション
2	4月16日	「学校教育の目標」とへき地校・小規模校・複式教育① (1) 日本国憲法から教育基本法、学校教育法、学習指導要領にいたる学校教育の目標を確認した。特に、改正教育基本法に示されている「教育の目的」と「教育の目標」を確認した後、現行の学習指導要領に示されている「生きる力」について再考した。 (2) へき地校、小規模校についてへき地教育振興法、同施行細則を中心に、へき地性、小規模性の意味について考えた。
3	4月23日	「学校教育の目標」とへき地校・小規模校・複式教育② (1) 複式教育について：「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」をもとに、複式学級編制の法的根拠について理解した。 (2) 長崎県のへき地校、小規模校、複式学級を有する学校の状況について：平成18年5月現在の状況に関する統計資料の提示と現状に関する認識を深めた。 (3) 小規模校のメリットとデメリットについて
4	5月7日	複式学級における授業① 北海道教育大学へき地教育研究センター制作のDVDの視聴と複式学級における授業特有のことばについての理解 ー間接指導と直接指導を中心にー 使用DVD [へき地教育実習～研究授業と児童との別れ～] (2005)
5	5月14日	複式学級における授業② 北海道教育大学へき地教育センター制作DVDの視聴と複式学級における授業特有のことばについて ーわたり、ずらしを中心にー 使用DVD「複式学級における学習指導シリーズNo.2 高学年の学年別指導算数その1」
6	5月21日	複式学級における学習指導 ～算数の指導を中心に～① 算数の授業を教材として、算数・数学教育担当の平岡が講義した。長崎県内における複式学級における授業（授業計画段階から指導）をもとに、複式における授業の工夫点、留意点について授業した。
7	5月28日	複式学級における学習指導 ～算数の指導を中心に～② 前回に引き続き複式学級における授業について授業した。
8	6月4日	附属小学校における授業参観 長崎大学教育学部附属小学校複式学級低・中・高学年3クラスの授業を平行して観察した。



写真1 講義開始時（本日の趣旨説明）の様子

データで解説するだけでは無味乾燥な講義になってしまう恐れもあるので、実際にへき地・複式学級設置校で勤務している教員の生の意見を織り交



写真2 「沖縄教育の現状とその特徴」の講義の様子

ぜながら説明した。

その後、「体験！複式授業－『小学校3，4年算数』から考える複式授業の実践」と題して算数

の複式授業を山口が約1時間にわたってその場で実演し（写真3）、この授業の分析を児童役の学



写真3 模擬授業の様子①（授業開始時）

生を含めた受講学生全員が吉田の司会のもとにストップモーション方式⁵⁾で行った。この実践の意図は、受講学生の目の前で実演される模擬授業を詳細に分析する過程を通して複式授業の特徴について考えることであった。模擬授業には、2006年12月8日（金）に長崎県対馬市立小網小学校で公開された研究授業の指導案を利用した。この指導案は通常の「わたり」、「ずらし」だけでなく、同時直接指導や同時間接指導を取り入れている。そのため、附属小学校における複式学級を典型としている学生たちには新しい実践パターンになるのではないかと考えた。さらに今回は、教師の意図、児童の反応・気持ちをその場で考えさせることを主なねらいとしたため、その場でライブ進行している授業を適宜止めてその都度分析した。児童役（3年生3名、4年生4名）は、模擬授業の開始直前に受講学生に呼びかけ、希望者が演じた（写真4）。模擬授業は、導入から本時の展開の前半



写真4 児童役の受講学生（手前の前から2列の4名が4年役、中央の前1列の3名が3年役の学生）

（20分程度相当）部分一折り紙という具体物を利用しながら課題である割り算（3年：九九を適用した余りのある割り算 $14 \div 3$ ，4年：3位数÷1位数 = 2位数 $256 \div 4$ ）の方法を考え、自力解決する段階まで一を演じたところで終えた。模擬授業の停止の指示は誰でも随時出すことができるようにしたが、初めての経験のためか受講学生からは「ストップ」のかけ声が出なかったため、吉田が3回停止させて受講学生へ発問した。児童役の学生を含めた全ての参加者が、その都度授業の様子と発問に対する自分の考えをワークシートに記入した。記入後にその考えを発表して意見交換し、最後に山口が発問に対する解説（解答）をするという形で1サイクルの分析が行われた。

模擬授業は指導案に示されている通りの板書や教具を準備して二学年同時に課題を提示する同時直接指導でスタートした。学年別指導の授業実践（とりわけ研究授業など観察・参観に提供される授業）は、「ずらし」の手法を用いて授業がスタートすることが多い。そのためこのような「あまり見かけない導入方法」の意図を受講学生に考えてもらうために、課題提示が終了した段階（開始から2分後）で授業を止めて1回目の授業分析（「二学年同時に課題を提示した理由」）を行った（写真5～7）。その後「式を考える」指示まで同時直接指導で行い、3年生側の直接指導に移った。3年生に対して、答えの見通しを立てさせるために14枚の折り紙を配付し作業させることで「九九にない割り算の方法」を考えさせるところまで行った後、4年生側へわたった。4年生側で間接指導時に考えさせた「割り算の式」を確認した後、3年生と同じように折り紙を配付し（写真8）、作業の指示をした直後、急に3年生側から指導案には書かれていない「はさみをつかってもいいですか？」という問いかけがあった（開始から10分後）。山口はそこで指導案にはない「わたり」を行い3年生側の直接指導へと移行し、この「予定外のわたり」の意図を考える2回目の授業分析が行われた。3回目の分析は両方の学年の自力解決の過程（開始から20分後）である。山口が交互に「わたり」を繰り返して机間巡視を行い、課題解決の支援をしたが学習過程は「ずらし」ていない。この同時間接学習の意義を分析したところで時刻が10



写真5 模擬授業を参観する受講学生



写真6 授業分析の様子①

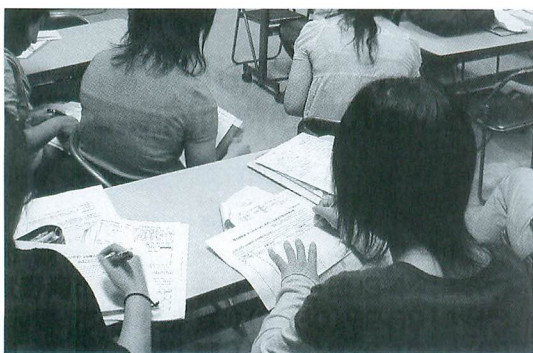


写真7 授業分析の様子②



写真8 模擬授業の様子②（4年生側への直接指導）

時10分を回ったため分析を終了した。最後の10分間で今回の講義の評価アンケートを記入して90分の講義を終えた。

3 受講学生による評価と今後の課題 ～アンケートの結果から

表2は当日の出席学生の性別、所属コースを表したものである。アンケートの回収率は100%であり、全て有効回答として分析に用いた。アンケートの各項目は5段階評価法で調査し、その理由を自由記述で質問している。さらに講義全体に関する要望や感想も自由記述で質問した。表3は講義内容についての評価をまとめたものである。

表2 講義アンケート回答者（当日の出席者）の内訳

所属\性別	男性	女性	計
初等教育コース	7	30	37
中学校教員コース	1	2	3
障害児教育コース	0	0	0
計	8	32	40

単位：人

「とても良かった/期待以上に良かった」に5点、「良かった/やや期待以上」に4点、「ふつう・どちらでもない/期待通り」に3点、「あまり良くなかった/やや期待はずれ」に2点、「良くなかった/期待はずれ」に1点をそれぞれ配点し、回答者の評価を点数化して集計したところ、全ての項目で平均点が4点を上回っていた。また、「とても良かった」、「良かった」を肯定的な回答、「あまり良くなかった」、「良くなかった」を否定的な回答としてまとめ、合計人数を換算し各項目について直接確率検定（二項検定による両側検定）を行った。検定の結果、有意な差が見られた。以上の結果から今回の取り組みは、受講学生に有意に肯定的に受け入れられたと推察できる。

模擬授業分析に否定的な評価をした者（1名）の理由には、「実際にへき地の学校で行われている授業のVTRを用いたストップモーション方式の授業分析をしたかった」、「全体（授業）を見て分かる教師の意図もあると思うので最初から最後まできちんと見たかった」、「グループディスカッションをして全体の意見交換をすると活発な意見

表3 授業評価アンケートの結果

項目	評 点					平均点	標準 偏差	直接確率検定 (両側検定)
	5点	4点	3点	2点	1点			
沖縄県のへき地・ 複式教育の概説	17	15	8	0	0	4.2	0.8	p=0.0000<0.01
男性・初 等	2	3	2	0	0	4.0	0.8	
内 男性・中学校	1	0	0	0	0	5.0	0.0	
訳 女性・初 等	13	12	5	0	0	4.3	0.7	
女性・中学校	1	0	1	0	0	4.0	1.0	
模 擬 授 業 分 析	24	15	0	1	0	4.6	0.6	p=0.0000<0.01
男性・初 等	3	4	0	0	0	4.4	0.5	
内 男性・中学校	1	0	0	0	0	5.0	0.0	
訳 女性・初 等	19	10	0	1	0	4.6	0.7	
女性・中学校	1	1	0	0	0	4.5	0.5	
講 義 全 体	24	10	4	2	0	4.4	0.9	p=0.0000<0.01
男性・初 等	4	2	0	1	0	4.3	1.0	
内 男性・中学校	1	0	0	0	0	5.0	0.0	
訳 女性・初 等	18	8	3	1	0	4.4	0.8	
女性・中学校	1	0	1	0	0	4.0	1.0	

N=40, 単位：人, 初等：初等教育コース所属, 中学校：中学校教員コース所属
評点

5点：とても良かった/期待以上に良かった 4点：良かった/やや期待以上
3点：ふつう・どちらでもない/期待通り 2点：あまり良くなかった/やや期待はずれ
1点：良くなかった/期待はずれ

交換ができたのでは」、「たくさんの教授が参観していた¹⁶⁾」ので、全体的に学生が閉口していた」と記されていた。この理由から、内容(素材)に不満があるというよりも、参観者が多数存在しているという非日常的な状況に対する不満と、模擬授業分析を最後までやり通したいという授業内容の消化不良を訴えていた。また、講義内容全体に対して否定的な評価をした者(2名)の理由は、「模擬授業が最後まで見られなかったのが残念だった」、「対馬の授業というより、沖縄で実際に行われた授業形式を見たかったです」という講義の時間配分や内容・素材の精選を求めるものであった。以上の結果から、否定的な評価は「もっと学びたいのに学べなかった」という意味で、講義内容やその方針・意図に特別に不満があるというものではなかった。

項目ごとに性別、所属コース別で回答内容の差異の有無を分散分析した。表4～6はその結果である。今回は母集団規模が小さかったことや性別や所属コースに偏りがあったこともあり、性別、

所属コース及びそれらの組み合わせ効果による違いはいずれも有意ではなかった。これは、受講学生のほとんどが高い評定点をつけていたことがその原因の一つとして考えられる。

表4 沖縄県のへき地・複式教育の概説に関する分散分析表

要 因	平方和	自由度	平方平均	F	p
性 別	0.3208	1	0.3208	0.52	n.s.
所属コース	0.3208	1	0.3208	0.52	n.s.
性別×所属	0.9571	1	0.9571	1.58	n.s.
誤 差	21.867	36	0.6074		
全 体	23.466	39			

表5 模擬授業分析に関する分散分析表

要 因	平方和	自由度	平方平均	F	p
性 別	0.0781	1	0.0781	0.18	n.s.
所属コース	0.1520	1	0.1520	0.35	n.s.
性別×所属	0.2429	1	0.2429	0.56	n.s.
誤 差	15.581	36	0.4328		
全 体	16.054	39			

表6 講義全体に関する分散分析表

要因	平方和	自由度	平方平均	F	p
性別	0.4334	1	0.4334	0.54	n.s.
所属コース	0.0470	1	0.0470	0.05	n.s.
性別×所属	0.7857	1	0.7857	0.98	n.s.
誤差	28.795	36	0.7998		
全体	30.062	39			

受講学生に一番印象に残った講義内容は「模擬授業分析」であり36名がそう回答した。今回の講義内容は二つしか無く、その評価が両方とも有意に肯定的であったにもかかわらずこのような結果になったのは、より長い時間を配分したこともあるが、講師の話を一方向的に聞くだけの座学講義ではなく、「動き」のある体験的な学びを取り入れたことが大きく影響していると考えられる。即ち、模擬授業という学習スタイルが、受講学生に「体験的」「実践的」な学びとして受け止められていることが関係している。これは、以下のような学生の感想から読み取ることができる。また、受講生が全員4年生ということも、より実践的な学びを求める声が多かった要因の一つだと考えられる。

- やはり自分の身をもって体験することで、身に付くと思う。
- 一方向的な講義でなく実際に目にすることでイメージがわき、分析の視点も見つけやすかった。
- 「体験する」ということが、やはり子どもにとっても大人にとっても大切なことだと改めて感じた。

さらに今回見えてきた「模擬授業」の効果として、「子どもになって考える」ことの重要性があげられる。今回、児童役となった7名の内、3名が「児童役」となったことに関する学びを以下のように記述している。

- 児童役をしてみても感じたことがたくさんあった。(他学年の)板書は目に入らない方が良かったと思った。
- 今日児童役に回ってみたが、やはり子どもの視点で授業をみていくと心情まで読み取れるのでおもしろいと思った。
- 児童役として授業にも参加でき、児童の立場から考え、授業を見ることができたので新しい発見ができた。

このような意見は、実践的に学ぶ時のポイントの一つが、児童になりきることに伴う学びにあることを示唆している。

二つ目は、ストップモーション方式による授業分析が、教師の意図と児童を見る視点を養うことになったという受講学生の受け止めである。教師の教授行為、行動をその場で止めて考えることが、授業一つひとつに教師が意図を持って発言し、働きかけることの重要性を学生に問いかけることになり、そのことが積極的に受け止められていたと言える。

- 教師の意図が考えやすく、また児童の目線で考えることもできるのでとてもよかった。イメージしやすかった。
- 模擬授業を行う際のストップモーションを行うことは理由付けを考えるのに最適だと思った。「なぜ」「どうして」と考えることで自分の授業者やその授業に対する考えが明確になるからだ。
- 授業を参観して、授業をみる視点として教師の意図を考えることの大切さやそれと同時に教師は1つ1つの自分の言動にしっかりと意図をもっておかなければならないということを学びました。

このような感想に示されているように、受講学生は「教師の意図」をキーワードとして授業研究をすることの重要性を学ぶことができたと推察される。さらに、この分析方法を初めて体験したためか、その方法を学べたこと自体に好意的な評価をした学生もいた。

これらの成果を踏まえつつ、学生が「もっと学びたい」と感じている点は以下の3点に集約される。

まず、「体験的」「実証的」な学びの場の重要性と継続性についてである。

- 実際に離島での見学や研修をしてみたい。
- 実際に今、複式学級を経験されている先生の話を知りたい。
- 同時直接指導や同時間接指導など複式指導ならではの指導法について今日のように模擬授業を踏まえながらもっと学びたいと思いました。
- 実際に授業を行ってみたいと感じた。

このような学生の要望にあるように、複式学級での授業実践に関する科目には、「模擬授業」「現場での観察・交流」等を組み込むことが求められている。

次に、できるだけ多くの教科・領域を取り上げていくことの重要性があげられる。今回は算数の授業を取り上げることしかできなかった。そのため以下に示すような他教科（とりわけ実技系科目）に関する要望が数多くあげられた。

- 国語や算数だけでなく、体育や音楽などの実技の教科の授業の組み方も見てみたい。
- 他教科（国語、社会など）の模擬授業やその分析研究も行ってみたい。
- 算数では今日のような形式での授業が可能であるが、他の教科ではどうなのか。
- 別の単元（各学年が）のときにはどのような授業をするのか、実際に見てみたい。

このような意見を踏まえて、今後は主要科目のみならず、少人数の体育や複式での音楽指導などを何パターンか準備し、それを紹介することも必要となるだろう。特に小学校教員を目指す学生にとっては、そのようなパターンや教材を蓄積しておくことは、現場での実践に役立つ知識・技能として不可欠なものと言える。

最後は「複式指導」の技能を深めたいという点である。長崎大学の場合、教育学部附属小学校に複式学級が設置されている。そこでは複式指導の実践的な研究が進められており、学生もその様子を観察する機会に恵まれている。しかし実際には、ここのような学級編成（低・中・高学年の3クラス全てを基準人数の上限で編成）は希で、多種多様なパターン（2年生と3年生というような変則複式学級、3年生と5年生というような飛び学年による複式学級、学年間で人数の偏りのある複式学級など）の複式学級が学校現場には存在している。

- 私も離島がある県での教職を目指しているため、とても勉強になりました。附属小学校の複式学級とはずいぶん違うなと思うと同時に、離島など少人数の複式学級の授業のあり方についても学んでおかないといけないと感じた。
- “複式学級”と一口に言っても、全国的に見れば進んでいる所もあれば、私が育った学校

のように設備が整っておらず、学習の保障という点に少し課題が見られるような学校もあるかもしれない。“一般的”なものばかりを取り上げるのではなく、様々な複式学級の様子を広く見ていきたいと思う。

- 複式学級での授業方法を今日のように模擬授業でまた受けたいです。そして型にとらわれず、いろんな方法でできるようになりたいです。また、片方の学年が一人の場合の複式学級についても学んでみたいです。
- 複式には授業を成立させるためのルール（例えば、先生が他の学年に説明している時は話しかけない、など）があると思うのですが、どんなルールを作っておくと、スムーズに授業できるか。
- 同時に同じ内容の授業をする時に何か配慮することはあるのか。1学年違えば発達段階も違ってくるのでそういったところはどのようにしているのか。
- 2学年間で子どもの人数が大きく違う時（6人と1人など）の授業はどのようにして行っているのか。

上記のような受講学生の感想からも、今回の受講を契機に学校の設備や環境、あるいは学校をとりまく状況の多様性や差異を学び取りたいという意識が生じたり、意欲が喚起されたりしていると推察できる。このような受講学生の意識の変容は講義・実習のあり方を考える上で重要である。これらの声は、「複式学級の実態や実際」、あるいはそこで行われている授業実践方法を深く数多く学ぶ機会を求めている。

4 おわりに

複式学級における指導法に関する科目は、教育職員免許法及びその関連法令で履修が義務づけられているわけではない。複式学級について深く考究する講座や学科がその大学・学部には設置されない限り、複式学級関連科目の単位数や科目数の増加は難しいのが現在の教員養成系大学・学部の教育課程編成の実情である。従って「半期2単位」で行う「最低限の講義開設」という条件の中で、「何を」「どのように」学生に学ばせるかという科目内容の階梯性や取扱いの軽重を考えるためにも、今回の二つの講義内容を取り入れた実践は意義が

あったと言える。

【註釈及び文献】

受講学生は「正直、話を聞くだけの講義だけだと思っていた」というように、体験的な活動を取り入れたことを好意的に捉えているだけではなく、「沖縄県の複式教育の現状」を知ることを通して「複式学級での授業実践をする上での問題」が長崎県だけというローカルな問題ではない、「離島やへき地を抱える地域に共通する問題であるという実情」や、「現場教師の生の声」を知ることができたと評価した学生もいた。今回の受講学生は全員4年次であり、養成段階で様々な実践の経験をすでに積んできていることもあってか、かなりモチベーションが高く、自ら講義に関わっていきこうとする姿勢が強く感じられた。このような学生の有り様とその実力をみていると、本実践事例は昨今盛んに求められている「教員養成段階における質の担保」への一つの回答を示唆するのではないか。

一方、三大学の複式学級指導関連科目の主担当者が本実践に際して一堂に会したことは、この科目の内容の質的保証を担保し、三大学のどこで学んでも「学校現場のニーズに応えた」、「複式学級での授業実践に必要な最低限の素養を身につけた」教員養成ができることにつながる。この点で今回の長崎大学での授業実践は、受講学生には負担に感ずるところもあったが、学生の主体的参加を促す講義内容の提供や大学教員の授業実践技術の向上のためにも非常に有効であった。

今後はこの取り組みが学校教育現場の抱える問題点を解決する手段として有効であるかどうかをさらに継続的に取り組みながら評価し、受講学生や社会のニーズを含めた形で評価内容を講義内容や大学の教員養成カリキュラム全体へ還元していくことを求めている。

【附記】

本授業実践は平成19年度文部科学省特別教育研究経費措置事業「離島・僻地校での教科指導力向上のための教育課程の編成—大学教員と小中学校教員の相互授業訪問を軸として—」により行われたものである。

- 1) 中山右尚, 八田明夫編, 新しい時代の要請に応える離島教育の革新, 南太平洋海域調査研究報告, 45, 2006
- 2) 長崎大学教育学部, 新しい時代の要請に応える離島教育の革新—長崎大・鹿児島大・琉球大三大学共同研究から—, 2007
- 3) 吉田安規良ほか, 「沖縄県の小学校複式理科授業の現状と教員養成カリキュラムの改善」, 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 35-57, 2007
- 4) 沖縄県教育委員会, 公立学校教職員人事異動方針 (昭和63年4月22日県教委改正), 1988
- 5) 沖縄県教育委員会, 公立小・中学校教職員人事異動実施要領 (平成17年10月14日教育長決裁 (平成18年10月18日改正)), 2006
- 6) 湯澤秀文ほか, 「沖縄県の複式学級における算数科指導に関する基礎的研究」, 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 23-34, 2007
- 7) 沖縄県の場合, 臨時的任用教員の割合が教員全体の9.1%を占めており (平成17年度沖縄県教育庁義務教育課提供資料から算出), さらに採用試験に合格しても正規採用せずに臨時的任用で雇用している場合もある。そのため正規採用教員より研修を受講する機会が少ない, 臨時的任用教員が複式学級を担当している可能性も高い。
- 8) 沖縄県立総合教育センター, 「へき地・小規模・複式教育における現状と課題」, <http://www.edu-c.open.ed.jp/kyouka/hekichi/13tyousa.pdf>, 2002 (2007年10月2日現在)
- 9) 吉田安規良, 松田恒一郎, 「沖縄県の公立小学校複式学級における理科授業実践上の問題点とその改善に関わりうる大学の教員養成への提言」, 南太平洋海域調査研究報告, 45, 27-31, 2006
- 10) 吉田安規良, 「“教員の卵”の目線に立った理科教育法—大学教員の中学校での演習授業に対する学生の評価—」, 理科の教育, 55(9), 54-57, 2006
- 11) 履修申込みした学生は69名, 最終的に単位を

修得した学生は39名であった。

- 12) 沖縄県立総合教育センター，平成19年度沖縄県立総合教育センター短期研修講座「小中小規模・複式学級担任講座資料（第1回）」，1-7，2007（2007年5月22日に沖縄県立総合教育センター及び沖縄県うるま市立宮城小学校で開催された講座の参加者への配付資料）
- 13) 藤川大祐，「ストップモーション方式入門ー三人で始める授業研究」，授業づくりネットワーク，52，7-10，1992
- 14) 津田順二，「キツイけど楽しくなる検討会ーストップモーションで変わった授業研」，授業づくりネットワーク，52，11-15，1992
- 15) 本来のストップモーション方式による授業分析とは，授業実践を記録したビデオを再生し，気になるところでビデオを一時停止させ，その時の教師や児童の言動について質疑応答や議論をする方法である。これを今時の大学生向けに簡潔に説明するには，現在放映中のテレビ番組「堂本剛の正直しんどい」（テレビ朝日系）の番組構成手法である，「ロケのVTRを再生しながら要所要所で一時停止し解説を加える形」を例示すると学生がイメージしやすいと思われる。
- 16) 当該講義は鹿児島大学2名，長崎大学4名，琉球大学2名の大学教員が参観する中で行われた。

資料1 長崎大学「複式教育論」シラバス (2007年度前期)

長崎大学教育学部 シラバス情報

長崎大学

教育学部 FACULTY OF EDUCATION
NAGASAKI UNIVERSITY

トップページ » 在学生の皆さまへ » シラバス情報

教育学部シラバスシステム

印刷画面へ

年度	2007			科目番号	4 1 1 1 0 1
科目名(和文)	複式教育論				
科目名(英文)	A Study of Teaching and Guidance in Combined-Class				
課程	学校教育教員養成課程		専修・コース	初等教育コース	
学年	4	必・選	選択	種別	講義
学期	前期	時間	月 1	場所	2 5 番教室
教官名	村田義幸, 平岡賢治, 橋本健夫, 附属小学校教員				
居室	5 1 8 号室		E-mail	muratayo@nagasaki-u.ac.jp	
来室時間	随時		電話	095-819-2394	
授業のねらい			合格水準		
へき地教育, 複式教育について理解し, 複式授業特有の学び方, 指導の仕方について考え, 工夫することができるようになることを授業の目的とする。			へき地教育に関心を持ち, 複式教育特有の言葉について理解		
授業計画・内容			評価方法		
<ul style="list-style-type: none"> ① オリエンテーション ② 複式教育, へき地教育について ③ 複式授業の観察 (1) ④ 複式授業の形式 (1) 間接指導と直接指導 ⑤ 複式授業の参観 (2) ⑥ 複式授業の形式 (2) わたり, ずらしを中心に ⑦ 複式授業の形式 (3) 小集団学習について ⑧ 複式授業の参観 (3) ⑨ 模擬授業をしてみよう (1) ⑩ 教科の特性と複式授業 ⑪ 模擬授業をしてみよう (2) ⑫ 複式授業の参観 (4) ⑬ 指導案を作ってみよう (1) ⑭ 指導案を作ってみよう (2) ⑮ まとめ 			<p>実習を中心におこなうので, 参加意識を重視します。</p> <p>参加意識50点, レポート30点, 発表20点</p>		
テキスト・用意するもの 適時資料を配付する。					
必読文献又は参考文献 全国へき地教育連盟発行「新しい時代を拓く心の教育シリーズⅠ～Ⅳ」 同 「へき地・複式・小規模学校の実践事例集」					
受講生への希望 月曜日の1時間目に授業を設定していますが, 授業参観を受け入れてくれる学校の行事予定等にあわせる必要があります。授業時間については適宜変更することになります。					

資料 2 講義アンケート

長崎大学教育学部「複式教育論」－「沖縄県のへき地・複式教育」講義アンケート

このアンケートは匿名かつ任意であり、得られた結果は研究・教育目的以外では使用しません。

今日の講義について、①～⑤についてはあてはまる番号・項目を○でかこんでください。
 ③、④は選択した理由も記入してください。⑤～⑦については自由に記述してください。

- ① あなたの性別は
 - 1. 男性
 - 2. 女性
- ② あなたの所属は
 - 1. 初等教育コース
 - 2. 中学校教員コース
 - 3. 障害児教育コース
- ③ 各内容について5点満点で採点し、その理由を回答してください

(ア) 沖縄県のへき地・複式教育の概説

理由記入欄					
とても良かった	5	4	3	2	1
良かった					
ふつう(どちらでもない)					
あまり良くなかった					
良くなかった					

(イ) 複式授業の方法(ストップモーション方式による模擬授業分析)

理由記入欄					
とても良かった	5	4	3	2	1
良かった					
ふつう(どちらでもない)					
あまり良くなかった					
良くなかった					

④ 全体として今日の講義は期待通りでしたか

期待以上に良かった	5	4	3	2	1
期待通り					
やや期待はずれ					
やや期待はずれ					
理由記入欄					

⑤ 一番印象に残った講義内容をあげて、それについて感想を書いてください。

講義内容		
感想		

⑥ 今後この講義で学んでみたい内容を書いてください。

⑦ この講義に関して、内容以外の要望や改善点などを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました。